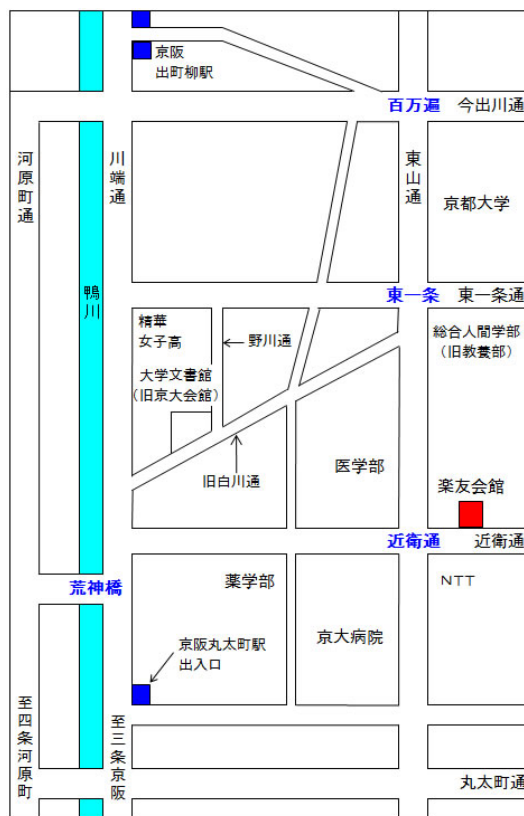


# インド思想史学会 第23回学術大会 プログラムと発表要旨

開催日：2016年12月17日（土）

会 場：京都大学 楽友会館

京都市左京区吉田二本松町 TEL: 075-753-7603



〒606-8501

京都市左京区吉田本町 京都大学人文科学研究所気付  
インド思想史学会事務局

TEL: 075-753-6949 (藤井) / 2460 (横地)

E-mail: hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp

http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~hit/

本状は郵便での送付に先立ってメールでも会員の皆さまにお送りしています。本状を添付したメールが届いていない会員の方には、メールアドレスが未登録ですので登録をお願いします（本文にお名前を書いたメールを事務局 hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp にお送りくださるだけで結構です）。

## インド思想史学会 第23回(2016年度)学術大会のご案内

インド思想史学会会長 井狩彌介

インド思想史学会第23回学術大会を下記の通り開催いたします。  
皆様、万障お繰り合わせの上ご参加ください。

### 記

開催日 2016年12月17日(土)

会場 京都大学 楽友会館 2階 会議・講演室

(理事会 12:00 - 13:00 京都大学 楽友会館 2階 会議室5)

参加受付 13:00 から 京都大学 楽友会館 2階 会議・講演室前

参加費：1000円 懇親会費：3000円

### 研究発表者および発表題目

13:30 - 14:20 高橋 健二(京都大学文学研究科・博士課程・日本学術振興会特別研究員DC)  
「Mānavadharmasāstra 第1章と Mahābhārata 第12巻第224-225章における創造・帰滅説の編纂過程の再考」

14:20 - 15:10 川村 悠人(京都大学文学研究科・日本学術振興会特別研究員SPD)  
「接辞重複問題に見るパタンジャリの言語理論」

—— 休憩 ——

15:30 - 16:20 酒井 真道(関西大学文学部・准教授)  
「瞬間性推理と内遍充をめぐる思想史の一考察 —ドゥルヴェーカミシュラが伝えるアルチャタとダルモッタラの見解の相違—」

16:20 - 17:10 藤井 正人(京都大学人文科学研究所・教授)  
「ヴェーダ文献における *yóga/yukti* について」

総会 17:15 - 17:45 引き続き、2階 会議・講演室で

懇親会 18:00 - 20:00 楽友会館 1階 食堂にて

# Mānavadharmaśāstra 第 1 章と Mahābhārata 第 12 巻第 224-225 章における 創造・帰滅説の編纂過程の再考

高橋健二

京都大学 博士課程 日本学術振興会特別研究員 DC

Mānavadharmaśāstra (以下 MDhŚ とする) の第 1 章ならびに Mahābhārata (以下 MBh とする) 第 12 巻第 224-225 章には四つの類似した創造・帰滅説がある。すなわち、MDhŚ I.12-20 における創造説、MDhŚ I.72-80 における創造説、MBh XII.224.11, 28-49 における創造説、そして MBh XII.224.74-225.16 における帰滅説である。これらの創造・帰滅説は、その哲学的あるいは社会思想的重要性から、西洋における「インド学」の発端当初から注目をあつめ、Eric Frauwallner の先駆的研究をはじめ多くの研究、あるいは諸現代語への翻訳が出版され、様々な見解が提示されてきた。両作品の難解さの原因の一つは、その複雑な成立過程にある。これらの創造・帰滅説は、四つの説に共通する創造・帰滅説の枠組みに、新たな要素を組み込みつつ、先行するいくつかの思想を繋ぎ合わされたものであり、それらをどのように整合的に理解するかによって、異なる解釈がなされてきた。本発表では、これまでの先行研究に依拠しつつ、それぞれの創造・帰滅説について、どのように先行思想が挿入されたかを明らかにし、さらに挿入部分の共通性・非共通性からこれら四つの創造説を比較検討し、相互関係を明らかにすることで、四つの創造・帰滅説がどのように発展していったのかを明らかにしたい。

本発表では、四つの創造・帰滅説は、三つの発展段階に分類することができ、MDhŚ はそれらのうち第一段階と第三段階に、そして MBh は第一段階と第三段階にそれぞれ対応することを指摘する。このことから、MDhŚ I と MBh XII.224-225 はそれぞれ複数の編纂段階を経たものであり、また両作品がほぼ同時代に編纂されたものであることがわかる。また哲学思想の発展という観点からすると、このようなテキストの発展には、創造・帰滅説が二つのテキストに組み込まれる過程で、先行思想を吸収し、また新たな思索を展開させていった哲学思想の発展の歴史を垣間見ることができる。

## 接辞重複問題に見るパタンジャリの言語理論

日本学術振興会特別研究員（京都大学）川村 悠人

A 5.2.94: tad asyāsty asminn iti matup は、第六格接辞の意味または第七格接辞の意味を表示するために、接辞 matUP が第一格接辞で終わる意味的連関項目の後に起こることを教える。この意味条件のもと、後続の A 5.2.95: rasādibhyaś ca から A 5.2.140: ahaśubhamor yus において、いわゆる所有接辞 (matvarthīya) の導入が規定される。第六格接辞の意味とは、行為と kāraka の関係を前提として成立する所有関係等の 関係 (sambandha) であり、第七格接辞の意味とは 基体 (adhikaraṇa) さらには 抛り所と依拠者の関係 (ādhārādheyabhāva) である。

[第六格接辞の意味] gomān devadattaḥ 「豊富な牛を持つデーヴァダッタ」

[第七格接辞の意味] vṛkṣavān parvataḥ 「樹々が茂る山」

A 5.2.94 に対するパタンジャリの論説の主題は、1. asya と asmin の言明目的、2. asti の言明目的、3. 所有接辞の過大適用、4. 属性表示語に後続する matUP、に大別できる。このうち 3 において、所有接辞で終わる語の後にさらに所有接辞を導入できるかどうかという問題が取り上げられる。具体的には、gomatvat 「牛たちがいる場所の所有者」(go + matUP [第七格接辞の意味] + matUP [第六格接辞の意味]) や daṇḍimatī śālā 「仗を持つ人たちがいる小屋」(daṇḍa + inI [第六格接辞の意味] + matUP [第七格接辞の意味]) は派生可能かどうかという問題である。Rama Nath Sharma は、多様な情報と示唆に富む労作として名高い一連のパーニニ文典訳注研究 (Sharma 1987–2003) の中で、gomatvat の派生が許されない一方で daṇḍimatī śālā の派生は許される理由を次のように説明する。

Note that an affix denoting the sense of *matUP* cannot be introduced after a stem which ends in another such affix identical in form (*samānarūpa*). This restriction, of course, does not apply to an affix which is dissimilar (*virūpa*) in form. Consider *daṇḍimatī śālā* ‘house of shaft-carrying ascetics’ where *daṇḍimatī* has *matUP* introduced after *daṇḍin* which, in turn, ends in *inI*. (Sharma 1999: 570.15–20)

しかし、二つの所有接辞が同形か異形かという点のみを問題の判断基準に据えるこの言は、文法学伝統に照らし不正確である。接辞の形だけでなく接辞の意味も接辞重複の可否に関わるからである。daṇḍimatī śālā の派生が許容されるのは、接辞の形が異なり (inI と matUP) かつ接辞の意味も異なる (第六格接辞の意味と第七格接辞の意味) からに他ならない。むしろ後者にこそパタンジャリの議論の重点は置かれている。Sharma の説明では、接辞の形は異なるが接辞の意味は同じである場合にも所有接辞の導入を許すことになってしまう。彼はパタンジャリの論点をつかみ損なっていると云わねばならない。本発表は、この点を指摘するとともに、uktārthānām aprayogaḥ 「その意味が既に表示された [言語項目] は使用されない」という言語使用の原則がパタンジャリの論陣の底流にあることを明らかにしようとするものである。

最終的に、所有接辞の重複が許されない場合と許される場合の条件は以下のようになる。

- 接辞の形が同じで接辞の意味も同じである場合 → ×
- 接辞の形は同じで接辞の意味は異なる場合 → ×
- 接辞の形は異なり接辞の意味は同じである場合 → ×
- 接辞の形が異なり接辞の意味も異なる場合 →

## 瞬間性推理と内遍充をめぐる思想史の一考察

——ドウルヴェーカミシュラが伝えるアルチャタとダルモッタラの見解の相違——

酒井 真道

インド仏教論理学研究において、「内遍充」(*antarvyāpti*)・「外遍充」(*bahirvyāpti*)をめぐる考察は古典的な研究テーマの一つである。この研究トピックは、瞬間性推理(*kṣaṇikatvānumāna*)の文脈で論じられることが多いが、その研究史を見れば、Mookerjee 1935 を皮切りに、これまでに数多くの研究が蓄積されている。

Mookerjee 1935 から始まる初期の主要研究は、主として、その著作の梵文原典が早くから出版されていたラトナーカラシャーンティ(ca. 970-1030)やジュニャーナシュリーミトラ(ca. 980-1040)、ラトナキールティ(ca. 990-1050)などの仏教最後期に属する思想家たちの思想分析を中心に進められてきた。そして、それらの研究が目指したのは、御牧 1984 に代表されるように、ディグナーガの論理学を発展的に継承したダルマキールティ(ca. 600-660/6 世紀中頃)の論理学をジュニャーナシュリーミトラやラトナーカラシャーンティらの思想——Kajiyama 1966 以来の研究では、Tarkabhāṣā におけるモクシャーカラグプタ(ca. 上限 1050-下限 1292)の言及を分類基準に、ジュニャーナシュリーミトラとその弟子のラトナキールティが「外遍充論者」に、ラトナーカラシャーンティが「内遍充論者」に、それぞれ分類されている——に投影させつつ、彼らの思想を解明することであった。

そして、次第に研究の射程には、400 年から 500 年程もある、彼らとダルマキールティとの間の隔たりを埋めるための資料として、その間に位置する、ダルマキールティ註釈者たちの著作が入っていくことになる。中でも、ダルマキールティの論理学は「外遍充」を否定すると明言した註釈者アルチャタ(ca. 710-770)はとりわけ多くの研究者たちの注目を集めることになり、彼はしばしば「内遍充論者」として評価されてきた。

現時点で、この一連の註釈書研究の掉尾を飾る研究が小野 2004 である。小野は、諸先行研究の成果を踏まえた上で、プラジュニャーカラグプタ(ca. 750-810)の著作をその註釈書を用いて解説することによって、以下のことを主張した。「内遍充」・「外遍充」という術語はジャイナ教徒による造語であると推測されうる。従って、ダルマキールティと彼以降の仏教論理学の特徴を、外部の基準であるこの二つの概念を用いて理解することには問題がある、と。小野のこの主張を裏付けるのは、プラジュニャーカラグプタの註釈者の一人であるヤマーリ(ca. 1000-1060)の指摘である。すなわち、ヤマーリは、「内遍充」・「外遍充」という種別は仏教徒以外の他学派を考慮して述べられるものであること、そして、それゆえに仏教徒であるアルチャタを「内遍充論者」とするのは誤りであることを指摘する。この発言は、現代の我々がそうしてきたように、ヤマーリの時代においてもアルチャタが「内遍充論者」として見なされていたという事実を示唆するものとして興味深い。

本発表では、アルチャタの *Hetubinduṭīkā* に註釈を施したドウルヴェーカミシュラ(ca. 970-1030)の報告に注目し、アルチャタが「内遍充論者」と見なされることになった所以について考察する。アルチャタが「内遍充論者」とされた理由は、彼が「外遍充」を否定したという単純な事実にあるのではなく、いわゆる因の三相中の第一である主題所属性の必要性についての、彼の消極的とも言える態度にあると考えられる。ドウルヴェーカミシュラは、主題所属性の役割についてのアルチャタの見解に疑義を呈し、それに賛同しない。その際、彼はアルチャタの見解を、アルチャタの弟子とされるダルモッタラ(ca. 740-800)の学説との対照において吟味している。本発表はその箇所注目し、ドウルヴェーカミシュラの眼差しを通して見える、仏教論理学の思想史におけるアルチャタの立位置について考えてみたい。また、ドウルヴェーカミシュラの解釈に依拠すれば、ダルモッタラの立場はアルチャタのそれに対するアンチテーゼとも言えるものである。よって、本発表では、ダルモッタラの立場についても併せて考察を行いたい。そして最終的には、彼らが属していた 8 世紀という時代が、仏教論理学の思想史にとって如何なる時代であったのかを明らかにしたい。

### 【参考文献】

Mookerjee, Satkari. 1935. *The Buddhist Philosophy of Universal Flux*. Calcutta: University of Calcutta.

御牧克己 1984「刹那滅論証」平川彰・高崎直道・梶山雄一編『講座大乘仏教 9 認識論と論理学』春秋社, 217-254.

Kajiyama, Yuichi. 1966. "An Introduction to Buddhist Philosophy: An Annotated Translation of the Tarkabhāṣā of Mokṣākaragupta." *Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University* 10: 1-173.

小野基 2004「仏教論理学派における「内遍充」と「外遍充」」『インド哲学仏教思想論集 神子上恵生教授頌寿記念論集』永田文昌堂: 457-492.

## ヴェーダ文献における *yóga/yukti* について\*

藤井正人(京都大学)

「(馬などを車に)繋ぐ」を意味する動詞 *yuj* の派生語であるヨーガ (*yóga*) が、精神集中、心作用の制御の意味で用いられるのは、中期ウパニシャッド以降とされている(例えば *Kaṭha-Up.* 6.1)。リグ・ヴェーダにおいては、「馬などを車に繋ぐこと」という原義、及びそこから展開した「遠征などへの出発」や「移動開始」という意味を終始保ちつつ、祭式や詩作の準備行為として、祭式や詩作の要素(心的なものを含む)を祭式などに「繋ぐこと」に対して多く用いられている(cf. *māno yuj, manoyúj-*)。ブラーフマナなどの祭式文献においては、ヨーガ (*yóga*) や同義語のユクティ (*yukti*) は、おもに次の3つの意味で用いられている。

1. 祭式全体の開始 (*yuj/yóga/yukti* : *vi-muc/vimoká/vimukti* 祭式の開始と終了)
2. 祭式要素(例えば特定のサーマン)の適用(使用)
3. 特定の祭事への始動ないし準備

3. の用法の例として、*Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa* (6.8.6) は、ソーマ祭本祭日の第一詠唱 (*bahiṣpavamāna-stotra*) 直前のヒンという発声 (*hīnkāra*) を、「ストーマ (*stoma*) (サーマ・ヴェーダ歌詠、歌詠形式) のヨーガ」と呼んでいる。また、*Lāṭyāyana-Śrautasūtra* は、ソーマ祭の各詠唱 (*stotra*) の開始直前に、詠唱ごとに異なる特定のマントラを唱えることによって、「ストーマを繋ぐ」と規定している(1.12.2; 2.1.1; 2.5.20; cf. 2.11.1 *stomaṃ vi-muc*)。さらに、同じく第一詠唱の直前の行為として、最初期のウパニシャッドである *Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa* (3.4-5) では、ヒン音やマントラとは異なった「ストーマのユクティ」が言及されている。そこで語られているユクティは、歌詠祭官が詠唱を歌い出す直前に行う呼吸、視覚、聴覚、思考機能(マナス)のコントロールである。

*tato haiva stoman dadarśāntarikṣe vitatam bahu śobhamānam. tasyo ha yuktin dadarśa. bahiṣpavamānam āsadya [ @ ] iti kuryāt. [ @ ] iti vācā. didṛkṣetaivākṣibhyām. śuśrūṣetaiva karṇābhyām. svayam idam mano yuktam.*

@ = ケーララ伝承のマラーラム文字写本では小さな丸印のみ。タミル伝承のグラントラ文字写本では、Baroda 写本: *prānya iti kuryāt / apānya iti vācā / Mysore* 写本: *mūccu viṭṭu prānya iti kuryāt / mūccu grahikka apānya iti vācā / Mysore* 写本を用いてテキストを校訂した Sharma によれば、*muccu viṭṭu* と *mūccu grahikka* はタミル語で、それぞれ「息を吐く」「息を吸う」を意味するという。

「その直後、彼(ムンジャ・サーマシュラヴァサ)は、ストーマが中空に広げられて、おおいに輝いているのを見た。彼はまた、そのユクティを見た。パヒシュ・パヴァマーナ(第一詠唱)[の場]へ座ったあと、[ ]と行うべきである。声を伴って[ ]と[行うべきである]、両目によって、まさに見ようとすべきである。両耳によって、まさに聞こうとすべきである。思考はここにおいて自ずから繋がれている。」

祭式の場における感官のコントロールによる精神集中としてのユクティは、今のところこの一例にとどまっている(この箇所に基づくと思われる、*Jaiminīya-Śrautasūtra* 注釈の *Bahiṣpavamāna* 章末尾におけるユクティへの言及を除いて)。しかし、この用例の背景となる祭式直前の呼吸や感覚器官のコントロールについては、他の文献に類例を見出すことができる。例えば、サーマ・ヴェーダのシュラウタ・ストラには、歌詠祭官たちが詠唱の時に一定の座法にのっとり座り方を行うとともに、精神を集中させるある種の行為を行うことを規定している(*LŚS* 1.11.22; *JŚS Paryadhya* 5)。

本発表では、ヴェーダ文献における *yóga* と *yukti*、および動詞 *yuj* の用例を精査するとともに、これらの語と関係付けられている祭式直前のさまざまな行為の具体的な内容を明らかにすることによって、*yóga* の語史研究に新たな材料を提供するとともに、精神集中としてのヨーガの先駆の一つが、ヴェーダの中に見出されることを検討する。

\* 本発表は、第 65 回印度学仏教学会 (2014.8.31) 及び第 16 回国際サンスクリット学会 (2015.6.30) での発表を再考し、最終版として提示するものである。